

## 第3章 調査結果の総括

### 1. 身近なみどりについて

身近なみどりとして、約8割の人が公園・緑地や街路樹などのみどりを選んでいる(11ページ、問8)。特に公園・緑地や街路樹は、もっと欲しいと思う身近なみどりでも上位に選ばれており、さらなる整備や管理の充実が求められていると考えられる(24ページ、問10)。

身近なみどりに関する満足度は、量・質ともに十分であると感じる人が約3割となっており、前回調査(平成24(2012)年度)と比較し、大きく変化していない。量と質の満足度は、量が十分であると感じる人が約6割であるのに対して、質が十分であると感じる人は約5割となっており、量に対しての満足度が比較的高い(17ページ、問9及び23ページ、2012年アンケートとの比較)。

身近なみどりに期待する機能では、都市の気温上昇をやわらげる機能、生活にうるおいを与え、心をなごませる機能が注目されており、日常の生活環境の改善に関わる機能を持つような身近なみどりの創出が必要とされている(28ページ、問11)。

### 2. 「杜の都」という言葉について

杜の都を代表するみどりとして、6割以上の人が定禅寺通を選んでいる(32ページ、問12)。

杜の都という言葉から思い描くみどりとしては、街路樹などの道路のみどりが約8割、公園・緑地が約6割である一方、屋敷林(居久根)の印象は非常に小さいものとなっている(39ページ、問13)。

また、身近なみどりについての設問と比較すると、街路樹は身近なみどりとしても、杜の都を表現するみどりとしても高く認識されており、都心部、住宅地の両地区において街路樹が充実していることがうかがえる(40ページ、身近なみどりと杜の都のみどりの比較)。

満足度については、量・質ともに十分である、量・質ともに不十分であると感じる人がともに約3割となっているが、前回調査と比較し、特に量に関する満足度が高まり、量・質ともに不十分であるという回答の割合が減少している(42ページ、問14及び46ページ、2012年アンケートとの比較)。

### 3. これから先の仙台市のみどりのまちづくりについて

#### (1) 樹林地などの身近なみどりの保全について

市街地にある樹林地などの自然のみどりの保全と都市開発との調和については、前回調査と同様に、みどりを残すべき又は回復させるべきだという回答が合わせて9割を超えており、大部分を占めている(47ページ、問15及び48ページ、2012年アンケートとの比較)。

また、個人などの土地のみどりの取り扱いについては、保全すべきだと考えている人は7割を超えており、前回調査からあまり変化はみられない。一方で、新たに選択肢に追加した町内会等が保全活動に参加するが2割を超えているが、法律などによる土地利用の規制や、市民や企業等からの募金は減少している(49ページ、問16及び51ページ、2012年アンケートとの比較)。

屋敷林（居久根）や社寺林の保全の方向性については、残すべき又は回復させるべきだという回答が合わせて約9割となっており、大部分を占めている（52 ページ、問 17）。

屋敷林（居久根）や社寺林の活用の方向性については、公開し見学できるようにすることや屋敷林（居久根）等を拠点とした情報発信施設の整備がそれぞれ約3割となっている（54 ページ、問 18）。

## **(2)市街地の緑化について**

市街地で重点を置くべき緑化箇所は公園・緑地や道路（街路樹など）が最も多く選ばれ、日常生活に身近な場所の緑化が求められていると考えられる（55 ページ、問 19）。

また、みどりの増加に必要な行政の取り組みについては、緑化義務や開発規制についての法律・条例の強化及び補助金支給や苗木配布などの助成制度が合わせて約6割の人に選ばれているが、前回調査から法律・条例の強化の割合が約1割減少している（59 ページ、問 20 及び 61 ページ、2012 年アンケートとの比較）。

緑化活動に必要な行政の支援については、緑化技術・緑化制度などの情報提供や緑化イベントの開催が2割を超えている（62 ページ、問 21）。

## **(3)公園について**

住まいの近くの公園について、利用頻度は、定期的に利用する人の割合が4割弱であり、ほとんど利用しない人の約5割を下回っている。また、近くに公園がないという回答も約1割あり、住まいの近くの公園の整備や利用促進を図る必要がある（64 ページ、問 22）。

住まいの近くの公園の役割については、子どもが遊べる、運動ができるなど、日常的な利用や機能を求める回答が多く、また、前回調査と比較して災害時の避難場所としての機能も高まっており、近年頻発する自然災害の影響によるものと考えられる（68 ページ、問 23 及び 75 ページ、2012 年アンケートとの比較）。

また、満足度については、量・質ともに十分であるや量は十分だが、質はよくない、量・質ともに不十分であると感じる人がそれぞれ3割程度となっている（76 ページ、問 24）。

仙台市内で増やしてほしい公園について、日常的な憩いの場となる公園や防災機能が充実した公園が多く選ばれ、常時と災害時の両面で利用できる公園の整備が必要であると考えられる（83 ページ、問 25）。

## **(4)「都心部」と「住宅地」の街路樹について**

全体として、都心部の街路樹より住宅地の街路樹の方が量・質ともに不十分であると感じている人が多いが、前回調査と比較すると、住宅地は量・質ともに十分であると感じる人の割合が増加し、量・質ともに不十分であると感じている人の割合が減少しているなど満足度が高まっている（89 ページ、問 26 及び 95 ページ、2012 年アンケートとの比較）。

街路樹に期待されている機能は都心部と住宅地で異なり、都心部では気候緩和など都市環境を改善するような機能が重視される一方、住宅地では紅葉などにより季節感を与えるが最も選ばれるなど自然を感じさせる機能が重視されている（98 ページ、問 27）。

高木の街路樹の管理方法としては、数年に1回程度の強い剪定で現在の樹木を活かすという回答が最も多く、前回調査と同様の結果であるが、割合としては、回答に新たな選択肢が

追加されたことを受けて、すべての選択肢で割合が減少している（105 ページ、問 28 及び 108 ページ、2012 年アンケートとの比較）。

#### **(5)定禅寺通・青葉通のケヤキ(街路樹)について**

定禅寺通・青葉通のケヤキについては、状態の悪いケヤキを順に植え替えると若々しく現在の並木を保つために計画的に植え替えるが合わせて 6 割を超えており、今の景観を維持する管理方法が求められていると考えられる（109 ページ、問 29）。

年代別にみると、20 代、60 代は約 4 割が状態の悪いケヤキを順に植え替えることを望んでおり、各年代に比べると高い。居住地区別では、定禅寺通・青葉通が位置する青葉区とその他の区では大きな違いはみられない（110～111 ページ、年代別、居住地区別）。

#### **(6)河川について**

仙台市の河川への親しみについては、全体では非常に身近に感じると身近に感じるの合計よりもあまり身近に感じないと身近に感じないの合計の割合の方が多くなっている（112 ページ、問 30）。

水辺の空間を利用するために必要なものについては、前回調査と同様に、駐車場やトイレ・手洗い場などの便益施設、散策路やあずまやなど日常的に利用する施設整備が求められている一方、自然環境の配慮についても求められている（116 ページ、問 31 及び 119 ページ、2012 年アンケートとの比較）。

### **4. みどり豊かなまちづくりへの参加について**

みどり豊かなまちづくりのために実践している活動は、自宅のベランダ等を花で飾るや家庭菜園づくりが多く、次いで、自宅の塀の生垣化や庭木の増加が多くなっている（120 ページ、問 32）。これから実践したい活動も同様に自宅のベランダ等を花で飾る等に加えて、身近な公園等の清掃やみどりに関する基金への協力なども挙げられている（126 ページ、問 33）。

緑化活動に参加するための条件については、活動のための時間などを自由に選べることや同じ目的を持った仲間がいることなどが求められている（133 ページ、問 34）。

みどり豊かなまちづくりのために最も必要なことについては、緑化に取り組みやすくなるような政策づくり（体制の整備）や市民・市民活動団体・事業者・行政の協働などが挙げられている（135 ページ、問 35）。

### **5. 「グリーンインフラ」について**

グリーンインフラという言葉について、約 8 割がいいえ（知らない）と回答しているが、多くの人々がグリーンインフラを取り入れたまちづくりを推進すべきであると考えている（137 ページ、問 36 及び 139 ページ、問 37）。

年代別にみると、50 代以上はグリーンインフラの認知度が比較的高く、70 代では約 3 割がグリーンインフラという言葉を知っている（138 ページ、年代別）。

グリーンインフラを取り入れたまちづくりについては、推進すべきである、どちらかといえば推進すべきであるの合計が、各年代で 7 割以上となっている（140 ページ、年代別）。